

【 家庭科 】

自らの生活を実感し

工夫する楽しさに気付く子どもを育てる家庭科学習

～思いや願いをもって対象にはたらきかける子どもの姿をめざして～

1. 「意味と内容」がひろがる家庭科の学び

① 家庭科における学びと育てていきたい力

家庭科の学習は、人やもの、環境などのかかわりを大切にしながら、食べることや着ること、住まうこと等を扱っていくこととなる。学習対象は、子どもたちにとって身近な家庭生活である。自分の家庭生活からスタートし、学んで身に付けた力を家庭生活で実際に生かしていくという、授業と家庭の間で学びが連続していることが大切となる。学んだことが、毎日の暮らしの中で役に立っているという実感を子どもたちがもてたときや、家族に喜んで受け入れられたり評価してもらったりしたときに、一層意欲的になったり自信を持ったりする姿につながると思われるからである。

時代や社会の変化に伴って、生活が変容してきていることもあり、いつでもどこでもほしい物が手に入る便利さの中で子どもたちは生活している。一方では、自分で実際に手や体を動かし何かを作る、家族の一員として家庭の仕事を分担する、というような実際の生活体験は減少してきている。例えば、道具を使うこと、料理を作ったり後かたづけをすること、洗濯をしたり掃除をしたりすること、お年寄りから生活上の知恵や工夫について聞いたり見せてもらったりすることなどが考えられる。生活が便利になったり簡略化されたりした結果、あまり生活を「意識」することなく過ごすことが可能となっている。その結果、多くの子どもが、家族の一員として自分の役割を考える機会をもつことなく、家族のありがたさや家庭生活の良さに気付いていないと考えられる。

また、情報化が進み、技術や経済が発達していく中で、衣食住の生活の多様化が進み、それに伴って家族や家庭生活における生活観も多様化してきている。情報が氾濫する中で、多くの知識をもっている反面、宣伝や見かけなどの影響も受けやすく、偏った見方をしてしまうこともあり、持っている知識を適切に使ったり、判断したり、実践したりする力が必要となってくる。

このような社会の中で生きていく子どもたちにとって、将来、自立した生活を行っていくための力を身に付けていくために、まず、自分自身の生活に関心を持つこと、そして、基本的な知識や技能を身に付けていくことが必要となる。それらをもとにして、よりよい生活を考えながら工夫しようとする創造力や、情報を上手に活用しながら、状況にあったふさわしいものや便利なものものを選ぼうと取捨選択する能力を養っていく必要があると考える。

②「意味と内容」がひろがる学びの姿

家庭科学習において「意味と内容」がひろがる学びとは、「毎日の家庭生活の中で生かしてみたい」「自分の生活の中では、どのような形で取り入れたらいいんだろう」という思いをもつ子どもの姿につながる学びのことである。自分たちの生活を支えているものや人々など、いろいろなことがらについて、実際の生活と関連させながら、子どもたちが改めて気付いたり発見したり疑問を持ったりする場を意図的に学習の中に作っていきたいと考える。学習の中に、できるだけ、実践的・体験的な活動を取り入れながらである。

子どもたちが自分の生活との関連を実感できる学習の中から、自分自身の生活を見つめなおし、考える。そこから、子どもの思いが、自分や家族の生活にすすんではたらきかける姿となってあらわれ、家庭生活における実践へと生かされていくこととなる。自らの生活を見つめなおし、よりよい生活をねがいながら家庭生活にはたらきかけようとする子どもの姿が、家庭科学習における「意味と内容」をひろげる子どもの姿である。

2. 家庭科でめざす子どもの姿

①自分の生活を見つめなおし、自分の家庭、家族が好きだと思える子ども

毎日の生活の中で行われている衣食住などの生活行為・活動に対して、子どもたちはあまり意識しないですごしていることが多い。家庭科学習をきっかけとして、自分や家族が家庭でどのように生活しているのかを見つめなおしたり考えたりした時、子どもたちが生活を意識して身近に感じるようになると思われる。生活を実感できるよう、実践的・体験的な活動を取り入れていくことで、「おもしろそう」「やってみよう」と、子どもたちの興味・関心へとつながり、「なぜ、そうするのか」「他の場合はどうなっているのだろう」と、疑問や問題意識が生まれることとなる。自分をこれまで支えてくれていた家庭生活を見つめなおし、日々の生活行為・活動にはそれぞれ意味があること、そして自分や家族の大切さに気付いてほしいと願う。疑問や問題意識をもって学習する中で、自分の家庭と他の家庭との違いや共通点が見えてくることにもなる。互いを認め合いながら、改めて自分の家庭の良さを見つけられる子どもであってほしいと思う。そして、自分の家庭、家族が好きだと思える気持ちが、よりよい生活を考えようとしたり、実生活に生かそうとしたりする子どもの姿となると考えられる。

②自分なりの思いや願いをもって、対象にはたらきかけようとする子ども

家庭科では、人・もの・自然とのかかわりにおいて、自分がどう生活したらよいかを主体的に考え、行動する子どもを育てることが大切となる。自分だけでなく、家族や周りの人々、自分の生活を大切に思う気持ちから、さまざまな思いや願いが生まれるからである。自分なりの思いや願いを持って、対象によりふさわしいと考えられるはたらきかけをしようと考え、創意工夫する子どもの姿が見られる学習をめざしていきたい。このような子ど

もの対象へのはたらきかけの中に、追求から追究へのまなざしの変容を見ることができる。自分の生活を見つめなおし、よりよくしようとする意識を持った中で、自分なりの思いや願いをもって対象にはたらきかけようとする子どもの姿が追究の姿であると考えてる。

3. 研究テーマ設定の理由

研究テーマ

自らの生活を実感し、工夫する楽しさに気付く子どもを育てる家庭科学習
～思いや願いをもって対象にはたらきかける子どもの姿をめざして～

子どもたちが意欲的に学習をすすめていくためには、子どもが自らの生活の中にある問題に気付き、それを解決するための知識や技能を身に付けたいと願い、身に付けた知識や技能を生かしたいという強い思いを抱くことが必要である。そして、生活への実践にあたっては、身に付けた知識や技能をどのような形で、どのような思いや願いを持って生かすことができるのかという点を特に大切に、個々の子どもがこだわりをもって取り組んでほしいと考え、研究テーマを設定するに至った。

(研究仮説)

- ・ 自らの生活を実感することが、自らの生活の中の問題やよさを発見することにつながっていくだろう。

↓

- ・ 生活していくために必要な知識や技能の習得の必要性を、実感させることができるのではないかと。また、実践への意欲へとつながることになるだろう。

↓

- ・ 対象への思いや願いをもつことによって、より自分なりの工夫をこらして実践を試みようとする姿が見られるのではないかと。

4. 家庭科学習でのまなざしの共有

①研究テーマとかわって ～子どもの思いによりそった題材の設定～

題材を設定するにあたっては、ごく一部の指定された題材をのぞいて、ほとんどは子どもの実態と照らし合わせながら、自由に身近で日常的な題材を設定できるようになっている。例えば、調理に関してであれば、「米飯およびみそ汁の調理ができること」をのぞいては、「日常よく使用される食品を用いて簡単な調理ができるようにする」という内容となっており、子どもの実態に合わせて弾力的に内容を組み合わせ、計画していくこととな

っている。家庭科学習において、題材の設定は大変重要であり、子どもや地域、学校に対応した、子どもにとって身近に感じられる題材の設定を行うことが必要となってくる。また、そうすることによって自らの生活を実感し、生活のよさや問題を発見する子どもの姿のあらわれにつながると考えられるからである。

子どものまなざしをみとるには、日頃の子どもの姿をよく見つめ、かかわっていく必要がある。子ども一人一人にそれぞれの家庭生活があり、家庭に対する思いも様々であり、日々変容していくものである。子どもの生活の様子を見つめるために、子どものつぶやきをこぼさないよう注意しながら、関わっていく時間を大切にしていきたい。そして日々の自由ノートを活用した教師や友だちとのやりとりを継続させていきたいとも思っている。家庭科の学習では、子どもの実情をとらえ、子どもの思いによりそった題材設定を行い、学習をつくっていくことが、子どもと教師の間における「まなざしの共有」につながるようになると考えられる。研究テーマとかかわって、題材の設定を行うにあたっては、次のような視点をもって行いたいと考える。

- ・子どもの家庭生活や学校生活において、日常にありえるもの
- ・子どもにとって親近感をもて、簡単に取り組めるもの
- ・子どもの個性を生かした取り組みが期待できるもの
- ・解決しなければならぬと実感できるもの
- ・解決後、子どもの生活の中での実践につながるもの

②生活を実感できる体験活動の設定

教師の具体的なかかわりとして、授業の子どもの様子や子どものノート、振り返りノートから見られる疑問や欲求をとらえ、子どもの興味・関心、思いを知っておかなければならない。そこから、子どもたちが話し合ったり共有できそうな内容をつかんでおく必要があると考えられる。そこから、子どもが生活を実感できる体験活動を仕組んでいく必要があるからである。

学習の導入において、「やってみたい。」「どうしたら～できるようになるのかな。」と子どもが思えるような生活に密着した、実際に作ってみたり試したりできる体験活動を仕組んでいくことが大切である。そこから、課題を発見し、「今、自分たちの生活の中で考えなければならない問題はなんだろう」「～できるようになるにはどうしたらいいのかな」と、明確な問題意識を子どもにもたせることが必要となる。体験活動や話し合い活動を通して知識や技能を身に付けながら、より自分の生活を実感し、よくするために考えながら実践につなげていこうとする子どもの姿をめざしていきたいと考えている。

具体例を挙げると、「自分たちの食生活について考えよう」をテーマに、学校給食とお弁当を取り上げ、自分なりのこだわりのあるお弁当作りを行う単元を設定した。自分たちの食生活について振り返ってみるとき、学校給食とお弁当が子どもたちにとって共通点もあり、好き嫌いが多くて給食の残量が多いという学級の課題もあった。自分たちの健康との関わりを考え、実際に試食・試飲してみながら「好き嫌い」や、「おいしいと感じるもの」「おいしいと感じられないもの」について話し合いを行った。だれもが「健康」のた



めには好き嫌いしてはいけなとわかっていながら、でも現実には嫌いで食べたくないものもある。でも、「このままでは…」という思いもあり、それぞれの家庭で行っていることを紹介し合ったり、アイデアを出し合ったりしながらよりよい食生活を子どもたちなりに意識することができていたと思われる。そして、それぞれの子どもがこだわりをもって「お弁当作り」に挑戦することができた。



③工夫する楽しさに気づき、自らの生活へつなげる実践

子どもが自分のもつこだわりを表現しようとしたとき、その子どもなりの工夫が見られる。「こんな方法がいいのではないか」と思考をかさねたことや、調べてきたことをもとにして、いろいろな方法を試してみることとなる。ここでは、子どもどうしが思いをぶつけ合ったり、それぞれの考えを共有し合ったりする場の設定も必要になってくる。子どもどうしのまなざしの共有である。調理方法や盛りつけ方、材料の切り方に関する意見が出てきたりすることが考えられる。

自分が「嫌いだから食べられない」と思っているものを工夫することによっておいしいと感じた時や、なんとかか口にすることができたとき、自分や友だちが工夫をこらした結果に達成感や喜びを味わうことができるであろう。「自分の家でもやってみたい」という思いを抱き、前向きな気持ちで実践へとつなげることができることとなる。子どもたち自身が、学習したことを「毎日の生活の中で活用してみたい」という意欲をもつこと、そしてその実践の繰り返しと家族とのかかわりが、工夫して実践することを楽しむ子どもを育てることになると考える。

④自分なりの思いや願いをもった対象をもつ

子どもが習得した知識や技能を生かして実践につなげようとしたときに、その対象がはっきりしていて、対象への思いや願いをもつことができれば、自分なりの工夫をよりこらすことができると思われる。そして、思いや願いをもって取り組んだことにより、味わえる喜びや達成感もより大きなものになると思われる。はたらきかける対象は、家庭生活や家族、友だち、お世話になった人、そして自分自身もふくまれる。

簡単な調理における実習の中で、「〇〇先生に喜んでもらえた。」「おいしかったよ、ありがとう、と言ってもらえた」など、相手との交流を通しての取り組みは、作る楽しさ、喜びを味わうことができていた。また、喜んでもらえるために、味付けや盛りつけ方などに、子どもなりの工夫が見てとれた。そして、「お父さんとお母さんにも作ってあげて喜んでもらいたい」と自信を持って意欲的に家庭での実践につなげる姿がみられた。このように、自分なりの思いや願いをもって対象にはたらきかけることによって、より夢中になって工夫をこらし、意欲的に実践へとつなげる子どもの姿が見られると考えられる。